

湾奥の日常、  
スノーカーフィッシング。



僕のシーバスフィッシングは年間の7割が東京湾奥での釣行だ。その中でも東京都内で釣りをする機会が8割。これほど人に近く、人工的であるにも関わらず圧倒的な魚数を抱えるフィールドは他を探してもないだろう。

そこには、最も身近な自然が人の目には見えない形で存在する。スーツを着たサラリーマン、通勤の路上で通学する子供たち、米の散歩や早朝のジョギングをする人々。そんな人々が行き交うすぐ傍で最も身近な自然、シーバスが乱舞するフィールドがある。それが東京湾で、専用のウエアや特別な装備は必要ない。運河沿いの遊歩道、整備された都市型河川のテラス、そして身近な水辺でカンパルなスタイルで必要最低限の釣り道具さえあれば成立するフィールドだから、手軽ながらも熱いゲームを堪能できる。ロッドを振る左手にしか味わうことのできない至福の時間を過ごしてしまいたい。後戻りにはできない。

幸い僕はそんな恵まれたフィールドに囲まれて育った。西に行けば隅田川、東へ行けば荒川や中川、旧江戸川、南へ行けば運河群や埠頭を含む港湾部といったフィールドが広がる。僕に釣りという日常が組み込まれたのは中学生の頃だ。当たり前のように釣りにいき、当たり前のようにロッドを振る。それが普通だった。

そのスタイルは今でも変わらない。身近だからこそ、いつでも通えるフィールドは、カジュアルな服装とスノーカーにウエストバック、タックルがあれば事足りる。通えば通うほど見えなくなるそのフィールドの奥深さを持ち合わせた東京は、いくら経験を積んでも、一生かけても攻略しきれないほどのキャンベティがある。それは経験値が増えるに連れて、それなりの難しい課題を与え続けてくれるフィールドとも言える。

これはどの奥深さやフィールドのキャンベティ、膨大な魚の数があるからこそ、日本一激戦区と言われるフィールドにまでなった東京湾奥。アングラの多さも日本一。仕事帰りに飲みに行くように、スポットを打ちに行くように、当たり前のように釣りに行く。非日常だった釣りが日常へと変わっていく。そんな生活の中でいつしか釣りにハマっている自分

に気づくはずだ。

僕は一人で釣りをする時間がとても好きだ。仲間と釣りに行ったとしても離れて釣りをすることも多い。後に合流して「ちほはどっだった、あつちはどっだった」と意見を交わすのが楽しい。

釣りはシーバスvs自分。そこにとことん集中できる時間がやっぱり好きなのだ。本気で集中して釣りをした後はぐっすり眠れるほど疲れるが、そんな疲れ方も好きだ。誰かの都合に合わせてでもなく、自分が選んだタイミングで自分が選んだ場所に行き、釣れても釣れなくても自分の責任。だからこそ、釣れたときの感動は人一倍大きい。もちろん魚を探すのもパターンを探すのも、仲間と一緒に釣りに行く時よりも時間がかかる。けれどすべて自分の考えを答えに辿り着いたときのなんとも言えない達成感。他では味わうことができない。

車に積みっぱなしの釣り道具。自分さえ乗り込んで釣りに行けばいつでもどこでも釣りができる。車は大きな釣り道具箱の役割も兼ね備えている。タックルはもちろんルアーやライン、その他の小物類。ウエスターにレイアウト、折り畳み自転車まで積んである。それが常であり、逆にこれらの道具を下して車を使うときが僕にとっての非日常だ。今では仕事となつてしまった釣りが、仕事としての釣りを除けばその8割が純粋に自分の釣り。いつものフィールドで自分の釣りたい魚を釣りたいように釣る。そこに様々な楽しさを見出すことで仕事の釣りへとライドバックしていくのが僕のスタイルだ。中学生の頃からこれだけ同じ湾奥で釣り続けてもそのワクワク感は最初にルアーでシーバス釣りに行ったときと変わらない。今日はどんなシーバスに出会えるだろう、そんな期待感が僕の足をフィールドに向かわせる。

釣りがしたくなったら釣りに行けばいい。そんな自然な感覚でいいじゃないか。釣らなきゃいけないものでもない、釣れなくても死ぬことはない、なにかについに釣りに行ってしまおう。釣れても釣れなくても楽しければそれでいい。いつでも釣りを楽しめる環境を作れる人に、僕はなりたいたいと思うのだ。